はじめに

近年、日本各地で文化芸術を活かした地域振興が注目されている。地域活性化の方向性がハードからソフトへ転換するなかで、多様なアート活動と地域を巻き込む芸術祭が数多く生まれている。日本における芸術祭のスタートは、1952年に毎日新聞社の主催で始まった日本国際美術展（東京ビエンナーレ）である。アジア最初のビエンナーレ形式の国際美術展だったが、1990年を最後に終了した(注1)。

その後、2000年に新潟県の越後妻有地域で大地の芸術祭、2001年に横浜トリエンナーレが始まると、日本各地で「芸術祭」と呼ばれるアートイベントが開催されるようになった。日本の芸術祭は、農山村や離島で開催される地域型芸術祭と、横浜トリエンナーレに代表される都市型芸術祭に大きく分けられる。過疎・高齢化が進む農山村や離島で、現代アートを活かして地域を元気づける地域型芸術祭は、日本独特のものである。自然や歴史、生業、食など地域の伝統的な文化と現代アートの、ミスマッチともいえる出合いを通して地域を刺激し、その魅力を顕在化する。そして人々の交流を生み出し、地域を活性化させる。地域型芸術祭は21世紀の新しい芸術活動であると同時に、地域おこし運動である。

2010 年の第 1 回に 93 万人を超える来場者を集めた瀬戸内国際芸術祭は、2019 年の第 4 回には、世界 32 の国／地域から 230 組のアーティストが参加した。過去最高の 118 万人の来場者を集め、日本最大の芸術祭として注目された。

瀬戸内国際芸術祭は瀬戸内海の島々を舞台に開催される。風光明媚である。半面、公害やハンセン病の隔離島など重い歴史を背負いながらも、島民は、漁と畑作を生業にして島の暮らしを守り、受け継いできた。芸術祭は、そうした日本近代史（産業史、および地域社会史）を凝縮する島の歴史に向き合い、現代アートを対峙させる試みである。

瀬戸内国際芸術祭 2019 の経済波及効果は 180 億円に達した。しかし、話は経済効果に終わらない。驚くほど多くのサポーターが芸術祭の運営に参加する。アジアを中心に欧米からも駆けつける。島民とアーティスト、サポーターの交流が地域を元気にする。島の人々がささやかな商いを始める。それを起爆剤にし、芸術祭が移住／定住の輪を広げる。

「国際」芸術祭を名乗るに相応しい、興味深い波及効果である。決してアクセスがいいとはいえない瀬戸内海の離島に、なぜ国内外から多くの人々が訪れるのだろうか。彼らを惹きつける芸術祭の魅力はどこにあるのだろう。

林立する芸術祭に対し、均質化、肥大化、陳腐化といった批判がある(注 2)。住民の主体性や内発性が必ずしも要件とされていない、という指摘もある(注 3)。人口減少地域で開催される芸術祭は、とくに手間と時間がかかる。静かに暮らしたいと思う地域住民と摩擦を生むこともある。しかし、訪れる人たちだけではなく、それを迎える地域の人たちが芸術祭をきっかけに自らの地域を再発見し、自分たちの住む地域への誇りや愛着を育むことにつながれば、その意義は大きい。

瀬戸内国際芸術祭の島々を巡ると、アートは、瀬戸内の自然と出合い、島々の歴史を知り、人々の生活を感じるための案内役になる。ただそこを訪れただけとは異なる新しい視点、発見をもたらしてくれる。アーティストが朽ちかけた古民家に配する生活用品の数々は、人の不在をより強く感じさせ、過去の営みや豊かさへの思いを起こさせる。ハンセン病の療養所がある大島の入所者が自力でつくった散策路を歩くことは、大島に閉じ込められた人々の悲しみと日々のささやかな楽しみを追体験する心持ちにつながる。島のお母さんたちが地元の食材を使って拵える料理は、アーティストがつくる空間の中でよりいっそう美味しく、嬉しい食の風景となる。

笑顔で少し誇らしげに作品や地域のことを教えてくれる地元の人、芸術祭の一端を担う元気なボランティアサポーター、往復の船中や作品展示の場で出会う来場者同士の微かな仲間意識―こうした芸術祭で出会う人々との交わりも、都会の人々を惹きつける大きな理由の一つである。

地域の未来を少しでも動かすことができる芸術祭をつくりあげる。それを長期的なスパンで育む。住民自身も気づいていない地域の資源、地域の宝を、そこに住む人々の矜持につなげる。芸術祭を機に移住する人や地域と多様に関わる関係人口を、地域の新しい産業の振興や地域コミュニティを長期的に支える担い手に育てる。そのためには何が必要だろうか。

芸術祭が一過性のイベントで終わることなく、①来場者と住民の双方が地域を再発見する機会につなげる、②地域の生活に根づき、地域創生を育む芸術祭にする―そのための知見、および要諦を、瀬戸内国際芸術際の企画・運営をとおして学ぶことが本書の目的である。芸術祭におけるアートの役割、社会課題との向き合い方、芸術祭のマネジメント、芸術祭が地域にもたらしたもの、さらには芸術祭の国際性など、さまざまな角度から瀬戸内国際芸術祭を調査・分析し、課題の解を探っていきたい。

なお、本書の構成は、以下のとおりである。

1 章で、瀬戸内国際芸術祭を概観したうえで、地域型芸術祭の嚆矢である大地の芸術祭について取り上げる。瀬戸内国際芸術祭に 10 年先駆けて開催された大地の芸術祭は、過疎高齢化が進む中山間地域で、現代アートを媒介として地域資源や里山の文化を再発見し、世代や地域を超えた広範な人々の交流を促そうというそれまでにない試みであった。大地の芸術祭を開催するに至った経緯、芸術祭による地域づくりの効果としてソーシャルキャピタル（社会関係資本）に着目した定量的な研究などから、芸術祭が地域づくりにどのような影響を与えたのか、その成果と課題を整理する。

2 章以降は、瀬戸内国際芸術祭に焦点を当てる。

2 章は芸術祭の舞台である瀬戸内海に着目する。瀬戸内国際芸術祭が、多くの人々を惹きつける要因の一つに「瀬戸内海」という場の力がある。「世界の宝石」と言われた瀬戸内海の歴史、自然、内海の島嶼と文化、景観等の特徴を概観するとともに、近代化のなかで傷ついてきた歴史に向き合い、瀬戸内国際芸術祭が 100 万人余の人々を呼び寄せるに至った歩みを辿る。

3 章では、瀬戸内国際芸術祭がどのように運営されているか。実行組織のあり方や財政基盤など、マネジメントや継続の仕組みを検証する。

4 章、5 章では、多くの来場者、繰り返し芸術祭に参加するアーティスト、こえび隊として活動するサポーターの状況など、交流人口の拡大と地域との関わりについて考察する。島民の芸術祭への関わり方、移住者の増加などから島の変容を探る。

6 章では、瀬戸内国際芸術祭の国際性、アジアをはじめ各国に伝播する芸術祭の影響について検証する。

7 章では、行政が公共政策として芸術祭を実施する場合の課題や留意点を整理し、検討する。

終章では、日本を代表する地域型芸術祭である瀬戸内国際芸術祭から得られる知見を整理し、他地域や芸術祭にとって有意義な示唆を導き出したい。